

### 第4回研究会 2017年7月2日（弘前市立南中学校の伊藤かずみ先生・Grant Bogdanove先生の授業）

英語指導研究会第4回の研究会が行われました。今年度第1回目の授業研です。土曜日の午後ということでしたが、14名の参加がありました。また、今回は将来教員を目指す大学生からもたくさんの参加があり、現職の先生と大学生の交流の場ともなりました。

そんな研究会の授業提案者は、弘前市立南中学校の伊藤かずみ先生とALTのGrant Bogdanove先生です。研究授業などで公開授業を見ることは多々ありますが、TTというのはなかなか見ることができない授業です。ALTとの打ち合わせの時間をどうとるのか？ALTとJTEの役割分担はどうあるべきか？など多くの課題が残るTTについて、いろいろな視点から話し合う有意義な研修会となりました。

#### 授業者から

##### 伊藤先生

- ▶ TTは忙しい、準備が大変、頻繁にできないなど困難なことも多いが、生徒には生の英語を聞かせる貴重な機会と考えている。日本語が入らないことが大切と考えている。生徒の英語のスイッチを入れさせるために、グラント先生には、こちらが指定した文や教科書を読んでもらうのではなく、自分の言葉で生徒に語ってほしいと思っている。

##### グラント先生

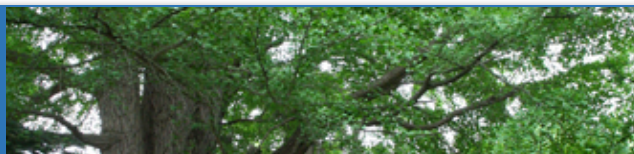
- ▶ 今日提案するような授業は僕にとっては非常にありがたい。とてもよい授業だと考えている。ただの発音のモデルや、黒板の英語を読むだけという授業ではないからだ。

#### 授業展開

対象学年は中学3年生

TTの時は、中1の時からこの形をとっている。

1. Crisscrossでウォームアップ
2. グラント先生に中3であれば200語程度の英語の文を考えてきてもらう。その際、文法や語彙の縛りは気にしない。今回のテーマは「スキヤキ（『上を向いてあるこう』の英訳の歌）」
3. グラント先生が考えてきた英文を2回聞かせる
  - 1回目は、生徒には書かせず、ジェスチャーや表情に注意して聞かせることに集中させる
  - 2回目は、聞き取れた単語をワークシートに記入させる
4. その後、生徒に自分が聞き取った単語を発表させ、グラント先生は、その単語を黒板に書いていく
5. ある程度キーワードが出そろったところで、グラント先生は内容を確認しながら、キーワードを関係のあるもの同士、線でつなげていく
6. スキヤキの歌を流し、同様に聞こえた単語を書きとらせ、発表させ、グラント先生は生徒から挙がった単語を黒板に書いていく
7. 「スキヤキ」というタイトルについてどう思うか？グループで話し合う
8. 生徒数名を指名し、グループのディスカッションの結果をレポートさせる



### 参加者からの質疑応答

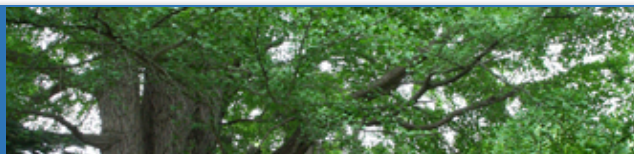
- ▶ 参加者からの疑問やコメント
- 授業者からの回答

### ウォームアップ (Crisscross)

- ▶ この活動のねらいは何か？
- 生徒の頭を英語に切り替えることと、楽しく英語の授業をスタートするための活動である
  
- ▶ どういう質問をしているのか？質問を作る上で配慮していることはあるか？
- ぱっと頭に浮かんだ質問をランダムに生徒に投げかけている。前時のターゲットの文法項目（現在完了）などを中心に疑問文を投げかけることもあったが、そうしてしまうと下位の子にとって厳しい活動になってしまう。
  
- ▶ 自分も中学生の時にやった活動であり懐かしさを感じた。ただ、この形式だと答える生徒が決まってしまう可能性がある。当たらなかった生徒に対してはどう対応しているか？
- 1時間ですべての子どもに当てるのは確かに難しい。2時間で全員にあたるように工夫している。
  
- ▶ 教師と生徒の1対1だと1人1人の話す時間が短くなるのではないだろうか。ペアによる会話にすると、もっと生徒1人1人の話す時間が増える。でも、この活動はネイティブスピーカーと話すチャンスでもある。どちらの活動を選択しても一長一短である。また、アリアナグランデの事件など時事問題のような問題を取り上げていることで、生徒の話したいという動機づけになっている。
  
- ▶ この活動に10分以上という長い時間をとっている。いつもこのくらいの時間を確保しているのか？
- 「最後の1人が座るまで」行う活動なので、クラスの英語力によって、終了時間に差が出る。10分弱で終わるクラスもあるが、通常は12分程度の活動である。
  
- ▶ アリアナグランデの事件に対し What do you think?という質問を投げかけているが、中学生には難しいと感じた。質問の難易度はどう設定しているか？
- 最初は難しい質問を投げかけ、上位の生徒にチャレンジさせる。後半は下位の生徒でも答えられるような質問を増やしていくようにしている。

### 展開 (ALT がスキヤキソングについて英語で紹介する)

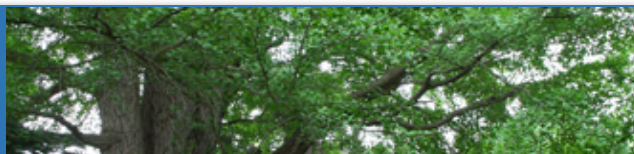
- 文法項目や語彙など、言語形式的なものより、論争的であったり、生徒に考えさせるような題材など内容を重視している。今回も、スキヤキソングを通してステレオタイプの是非について生徒に考えさせたい。



- 2回聞かせているが、1回目、2回目の読み方について意識して変えているところはあるか？
- 最初はノーマルスピードで、2回目は生徒がメモを取ることに配慮して、英文を区切ったり、ポーズを置いたり、ゆっくり読むようにしている。
- 最初にノーマルスピードで読むことで、生徒が「なんて言ったんだろう？」という気持ちになって2回目を聞く動機づけになっている。ただ、1回目のリスニングの時から下を向いて書きとっている生徒が見られる。指示が通っていないのではないか？
- 確かにそういう生徒が見られる。補足して、1回目書かせずにただ聞かせるというのは、生徒に聞かせることと、書かせることの2つの作業を同時にさせるのは厳しいという意味もある。
- 生徒に考えさせるような内容にしたいと言っていたが、今は聞き取った単語を書いているだけに見える。生徒は内容を理解できているのか？
- 細かい部分までとはいかないまでも、概要は理解できている。
- 黒板の文字をただ線で結ぶだけでは上位の子どもは理解できても、下位の子どもには厳しいのではないか。マグネットシートに単語を書いて貼るといった形をとれば、まとめる段階で、自由に動かすことができ良いのではないか？
- 黒板にランダムに書くのではなく、関連する単語を意図して近づけて書くという方法をとってもいいのではないだろうか。
- 最低限この単語を聞き取ってほしいというものを聞かせるための事前に指示や指導はあるのか？
- 特にない。生徒に任せている。

#### 展開（生徒から単語を挙げさせて、ALTが関連する単語を線で結んでいく）

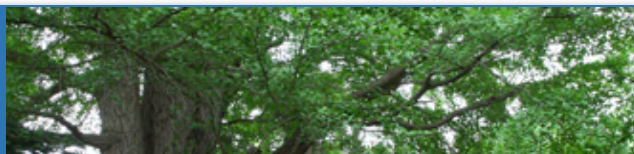
- ALTが内容に関連性がある単語を、チョークの色を使い分けながら結んでいく。JTEは下位の子の支援と書けているのに発表できずにいる子の動機づけにまわっている。
- 一部の活発な男子生徒だけが発言しているように見える。女子生徒や発言できない生徒への配慮はあるか？
- JTEがクラスを回って、まだ出されていない単語を書いているのに、言えずにいる生徒に発表を促したりしている。
- 決まった生徒しか発表してない場合は、グループにするなど形態を変えることが効果的だとも思う。まったく書いていない生徒はいるか？
- カタカナで書きとっていいということにしているので、まったく書いていない生徒はいなかった。ただ、カタカナで書いている子には、机間指導の際に辞書を参照させて、英語で書かせるように促すようにしている。



- ▶ 基本的に難しい活動である。自分が授業をするのであれば、まず、導入でスキヤキソングを聞かせて、Do you know this song?と問いかけ動機を高めた上で、英語で説明、そして最後にディクテーションという流れに思う。
- ▶ せっかく生徒が聞き取っても、それを使う場面がなくてもったいない。
- 今日は、曲を聴かせる活動があったので省略したが、通常の流れであれば、マッピングをした黒板を使ってもう一度スピーチを聞かせている。
- ▶ ALT のスピーチとスキヤキソングの聞き取りの 2 つのタスクは多いと思う。特に下位の生徒には酷である。大きな 1 つのタスクという視点で見た場合、歌詞の理解をさせた上で、「なんでスキヤキというタイトルになったのか」は生徒に預けるという流れも考えられる。
- ▶ いつも授業を見て感じるのだが、子どもが理解していない状況ほど先生は一生懸命になってしゃべるという傾向が見られる。For a teacher, Not for students.である。

#### 展開 (グループになってなぜ「スキヤキ」というタイトルになったのか? それについてどう思うかを話し合う)

- 日本=スキヤキ、アメリカ=ハンバーガーというステレオタイプの是非について生徒に深く考えさせるのがねらいである。
- ▶ 「文化理解」という目的であれば OK だが、リスニング力を育てるという点であれば、何かを聞かせる、言っている単語をキャッチするなどの活動がもっと必要である。
- ▶ 中 3 であれば難しい内容でも授業が成立するのだなと思った。
- ▶ 生徒たちは意欲的に発言している。自分が中学生の時に授業は ALT の先生とアクティブに会話する機会はほとんどなかった。曲を聴いて単語を書きとるという難しい課題にも頑張って取り組んでいた。すべて聞き取れなくても、聞き取れた単語から意味を推測するというのは普通のリスニングにも通じるものがある。
- ▶ 中学の時にやった、映画を見て聞き取った単語を書くという活動を思い出した。All English の授業を自分も目指したい。レベルの高い授業を行えば、生徒も「がんばらないと」という思いになり、動機づけになる。
- ▶ ALT が T1 として堂々と授業をしていることに感心した。シェアリングの時に生徒の発言内容も立派であった。普段から深く考えさせる授業を積み重ねている成果であると考えられる。英文を見ない



こともレベルの高さを感じたが、一方でリーディングやスピーキングなど違う技能と組み合わせることで、さらに英語力が強化されるのではないだろうか。

- ▶ ALT の準備が素晴らしい。英文を用意してしかも T1 として指導している。生徒にとって一見ハードルが高そうだなと思われるものをやらせるのも必要である。テキストから離れて、今日のような活動を継続的にやらせることで、生徒にとってもいい刺激になると感じた。
- ▶ 生徒目線で授業を見ていたが、とても楽しそうな授業であった。ALT の先生が考えてきた英文には実に多くの文型や語彙が使われていた。
- ▶ ALT との TT はどうあるべきか？というのを勉強したくて今日この研修会に参加した。グラント先生が考えてきた英文をグラント先生が話しているということに意味があるのだと思った。「スキヤキというタイトルをどう思うか？」大人の私でも難しい質問に中学生が答えていることがすごいと思った。

### 丹藤先生から

ある意味では、ALT を生かして授業づくりと言ってもいい。それは ALT の目から見た教材作りという点である。日本人が作ってもなかなか今日の教材にあるような着眼点にならない。子ども達が一生懸命で、何とか授業を盛り上げようとしている。いいクラス、いい授業づくりができています。

参加者、特に大学生には、「指導案に見えない部分の看取り」を身に付けてほしい。今日の話合いで何度も出てきた、生徒の実態がこのひとつにあたる。

### おわりに

TT について、じっくり時間をかけて考えるいい研修会になりました。TT は英語の教師であれば、避けては通れないものでありながら、その効果的なあり方に関しては、まだまだ課題が多いと感じています。それは、学校事情や JTE と ALT の英語や指導に対する考え方が多様であり、「TT の効果的な授業はこれ！」という一般化ができないことが原因ではないでしょうか。そうである以上、このように、1つ1つの事例を見ながら、検討していくことが、ゆっくりでも確実な道だと感じました。

最後に、研修会のまとめとして、お話いただいたグラント先生の言葉が非常に印象的でした。

「ALT ともっと親しくしてほしいです。たくさん雑談してほしい。今日の授業の準備をすごいと言ってもらいましたが、全然すごいことじゃないんです。ALT を働かせてほしい。ALT の一番の文句は、仕事がないこと、暇なことです。ALT はいつも仕事がしたい、働きたいと思っています。」

(文責 佐藤)